

## 中田敬吾(なかた けいご)先生のプロフィール

1975年 京都大学医学部大学院に入学、胆道系の研究で医学博士となる(昭和56年)。  
京大病院内科で二年間の研修を行う。

1977年 聖光園細野診療所に医師として入所。

1984年 聖光園細野診療所副院長就任。日本東洋医学会評議員・理事に就任。

2003年 聖光園細野診療所院長就任。

2005年 日本東洋医学会評議員・理事、和漢医薬学会評議員に就任。

専門科目:内科全般

### ◆先生が初めて漢方と出会われたのはいつ頃ですか

小学生の頃、歯科医で鍼灸師の免状を持っていた父親の元に、ぎっくり腰で歩けず家族に背負われて鍼治療を受けに来た患者が、帰りには一人で歩いて帰るのを見た時、自分もこの様に鍼治療が出来る医者になりたいと思った。



これが漢方と出会った最初の思い出です。

### ◆先生の御専門で漢方はどのような効果を発揮していますか

私は内科全般で特に細かな専門領域は持っていません。  
強いて云えば大学院で胆道系の研究をしたので、消化器系がどちらかというと専門に近いかも知れません。

消化器系疾患では、最近ではストレスによる過敏性腸症候群の患者が増えてきているように思われますが、これに対し漢方治療は消化管の機能失調改善に優れた効果を発揮しています。

漢方薬が心身両面に効果があるので、心因性疾患に特に有効性が高いと考えています。

### ◆普段の治療で漢方薬と西洋薬との割合はどれくらいですか

殆ど100%近く漢方薬だけを用いて治療しています。



### ◆10年後の漢方医療はどうなっている(またはどうあってほしい)とお考えですか

人材育成のための教育システムが完備している。  
そのための教科書の充実。漢方専門医の中でも更に循環器、消化器など各科専門家が登場。  
漢方エキス製剤の原料品質をチェックする機構が登場。  
良質の漢薬原料の確保と安定供給のための研究が日中共同で開始されるのではと思います。

### ◆先生ご自身漢方を飲んで効果を実感なされたことがありますか

日常茶飯事にあります。  
飲み過ぎたときの五苓散や葛根湯加半夏の効果、  
痛風に対し越婢加朮附湯、桂枝越婢湯の有効性。

食べ過ぎの時の平胃散の効果、口内炎に対する加減涼膈散の効果、  
蕁麻疹に対する柴胡桂枝湯加桃仁牡丹皮の効果、  
食欲の無いときの半夏瀉心湯の効果、疲れたときの細野家方清暑益気湯の効果、

風邪の初期の葛根湯加半夏の効果、インフルエンザの時の浅田家法柴葛解肌湯  
の効果、感冒で咽喉痛の強度の時の半夏散及湯の効果、  
咽がイガイガして空咳の出るときの麦門冬湯合半夏厚朴湯の効果などなど。



### ◆これから漢方医を志す方に一言お願いします

まず、西洋医学をしっかり勉強し、自分の専門領域を身につけること。

その上で漢方の経験の深い先生について漢方の指導をして貰う。  
独学ではなかなか自得出来ない面が多いので、師匠について実際に患者さんを  
一緒に診察しながら勉強して行くことが望ましい。

### ◆漢方に関心のある一般の方に一言お願いします

関心を持って色々勉強されるのはよいことですが、勝手に薬を用いるような  
医者まねごとはしないようにして下さい。

漢方の考えや理論を勉強して、日常の食生活や  
養生に生かすように心がけて下さい。

### ◆座右の銘、お好きな言葉などありましたら教えてください

「高而不奢」「融通無碍」

注意:先生へのインタビューは、当会が2005年9月に行った内容です。

